

生徒への本の薦め方

愛知県立成章高等学校 荻野 堅資
愛知県立福江高等学校 鈴木 ふみ

1 研究のねらい

生徒が本とかかわる機会を増やそうと、「図書館だより」を配付したり、「新着図書案内」をクラス掲示したりしているが、図書館への来館者は増えず、生徒の反応は少ないように思われる。また、自分が読んで面白かった本が、必ずしも生徒の関心を引くとは限らず、その魅力を伝えることはなかなか難しい。そこで、今回の研究の機会を得たことから、各校における生徒への本の薦め方の取組を収集し、効果的な取組について考えてみたい。

2 研究の方法

愛知県学校図書館研究会高校部会東三地区協議会に所属する 26 校にアンケート調査を行う。生徒への本の薦め方について、「図書担当の先生による取組」「図書委員など生徒による取組」「問題点や課題点」の 3 つの質問に対して、生徒の反応や効果を含めて記述回答をお願いした。

また、具体的な取組として、福江高校における「公立図書館と連携して本を薦める図書館活動」について報告する。

3 研究の内容

(1) アンケート調査の結果について

各校から寄せられた取組において、生徒の反応や効果が見られたものを抜粋して紹介する。

ア 図書担当の先生による取組

(ア) 読書コーナーや読書企画、配架の工夫

- ① 毎年発表される本屋大賞受賞作品については年ごとに展示してあり、また、「映画化された本」「ドラマ化された本」などのテーマを設定して、それに沿った本を集めて書架に並べた。前面に出して並べてある分、手に取られる頻度は高い。
- ② 季節や行事にちなんだ本を表紙が見えるように棚の上に出しておく。目につくように手に取ってすぐ見ることができるように。例えば、遠足の時期に「おべんとう」、夏に七夕の本、年末年始に十二支の由来、節分の頃に鬼の出ってくる絵本等。すぐに貸し出される。
- ③ 修学旅行などの大きな行事に合わせて図書館内の本を選書し、おすすめ本のコーナーを作った。今年から修学旅行先が変更したこともあり、図書館を訪れた生徒が興味を持って手に取っていた。
- ④ 検定資格試験問題集や過去問コーナーを設営した。これまでは教室に居場所がないために図書室に来る生徒が多かったが、目的を持って訪れる生徒が増えた。
- ⑤ 『Library Now』のおすすめ本リストのコーナーを作っている。読書感想文の本を薦めるのに有効である。

- ⑥ 新着図書をカウンター付近に並べて（手作りのブックスタンドを使用）、生徒が手に取りやすいように工夫している。また、生徒の需要に応じて必要な時期に特集コーナーを設けている（本屋大賞コーナー・映画コーナー・進路コーナーなど）。新着図書の貸し出しは多く、特集コーナーに展示してある書籍に手を伸ばす生徒もいる。
- ⑦ お薦め本のコーナーを設置する（「人気貸し出し図書ベスト10」、「ビブリオバトルでのチャンプ本」など）。お薦め本を面出ししたり、POPをつけたりした本はすぐに借りられる。
- ⑧ 新刊本はコーナーがあって面出ししてあるが、本棚に入れてしまうと埋もれてしまう。これらの本を、もう一度手に取ってもらえるように、「埋もれ本救済コーナー」を作っている。今回は、紀伊國屋書店ウェブストアの企画「中学生はこれを読め」の企画を利用して、閲覧用机一台を用意し、「高校生も読んでみりん」のコーナーを設置し、100選の中から本校の図書館にある高校生向きの本を選び、POPと共に展示した。紀伊國屋書店ウェブストアの企画は終了と共にホームページから削除されたが、愛知県書店商業組合のホームページにも同じ企画があるので、紹介してある本は違うものの参考にすることができる。
- ⑨ 「福引き本」の企画を新たに考えた。読みやすい本を10冊ほど選び、外見からはタイトルが分からないように包装した。くじ引きを用意し、生徒が引いた番号の本を、タイトルを隠したまま貸し出した。図書室をよく利用する生徒が、自分で選んだ本に加えて「福引き本」とセットで借りてくれることが多かった。普段は本を借りない生徒も面白がってくじを引いてくれた。

(イ) 個々の生徒への対応

- ① 図書館によく来る生徒には、こちらが読ませたい本で、個々に合った本を薦めている。生徒は興味を持って読むことができたようである。
- ② 来館した生徒の求めに応じて本を紹介している。特に課題として出されたものに関する本が多い。生徒は満足気である。
- ③ 来館者に対して声かけを行い、本を探している生徒には積極的に話をし、その本と一緒に探したり、別の本を提案したりする。話をしたい生徒には雑談の中で、最近読んだ本の話の聞いたり、自身が興味を持っている本を紹介したりする。
- ④ 3年生の大学入試で、小論文や面接試験が必要な生徒が図書館を訪れた際、「読むだけ小論文」（樋口裕一著、学研プラス）を紹介した。志望する分野の知識をインプットするのに有用であり、生徒は喜んでた。
- ⑤ 開館時に教員も図書館内で自由に過ごすようにするなど、生徒が気軽に図書担当に話すことができる空気をつくるように努めている。ざっくばらんなリクエスト（例えば「なんか泣ける本ないですか？」など）でもしやすくなり、読書のハードルが少し下がった。
- ⑥ 蔵書点検をしながら本を紹介する。点検を一緒にした図書委員は興味を示していた。
- ⑦ 図書館の返却用紙に購入希望図書記入欄を作成してある。これを利用して書店でブックハンティングを行い、生徒が興味を持つ本を直接選んで購入している。

(ウ) 教員による図書の推薦

- ① 全教員の推薦本をまとめた冊子を毎年作成する。好きな先生が推薦した本を探しに来る生徒がいる。
- ② 新転任の先生及び各教科の代表の先生に本を紹介してもらっている。

- ③ 文化祭において、「先生方おすすめの本」の冊子を作成し配布している。

エ) 授業時における図書の紹介

- ① 先生方に、授業やホームルームで本の話をしたり、授業で図書館を使用したりするよう依頼する。先生方から紹介された本を探しに来たり、授業のついでに本を借りたりする生徒がいた。
- ② 図書館で授業を行い、生徒が授業に関連する本を借りるような指導を各教科に願います。特に地歴公民の授業では確実に貸出冊数が増える。

イ 図書委員など生徒による取組

ア) 購入希望図書の選定

- ① 購入希望図書について、図書委員を通じてクラスの生徒に聞く。希望を出した生徒は本を借りに来ている。
- ② 年2回、豊橋市内の書店へ生徒図書委員が出向き選定している。生徒にとって「自分たちが図書館蔵書の選定に携わることができる」ということで好評な行事と言える。

イ) POPの作成

- ① 図書委員が薦めたい本について、POPを作成し図書館に展示した。生徒が作ったPOPであるので、興味を持つ生徒が多かった。
- ② 本のPOPや図書館川柳のコンテストを行う。優秀なPOPは、豊橋市の図書館でも展示する。
- ③ 図書委員による本のお薦めポップを作成してポップコンテストをしたり、紹介帯を作成して本に付けたりした、本の葉作りなど、文化祭に向けて生徒企画を行った。
- ④ POPを作成したり、図書室に季節感のある飾りつけ（クリスマス・正月など）を行ったりしたところ、生徒同士が図書室に来る（利用する）よう呼びかけるようになった。
- ⑤ 「POP製作所」という机を一つ用意して、はがき大の色画用紙やマーカー、色鉛筆、折り紙などを準備し、そこで来館した生徒が自由にPOPを作成できるようにしてある。

ウ) 図書館企画、展示の工夫

- ① 図書館だよりに、図書委員による推薦図書をコメント付きで載せて配付し、その本の展示をしている。来館する生徒は手に取りやすいようで、貸出が多少増える。
- ② 図書館だよりの中で、図書委員が単純に本の紹介をするだけではなく、「思わず手に取ってしまうようなタイトルの本」「好きなジャンルの本のタイトルだけをひたすら並べてみる」などの企画を立て、記事を書いた。
- ③ 図書委員の発案で、「図書委員オススメ本」の冊子を作成し、教室に提示した。
- ④ パーテーションのひとつに「〇〇高校伝言板」という掲示板を作り、8センチ角程の付箋とマーカーを用意し、生徒に一言メッセージを書いて貼れるようにした。すると、自然発生的に自分が読んで面白かった本を書いてくれ、本の紹介コーナーとして定着した。
- ⑤ 2学期終業日午後「図書館フェスティバル」を実施し、多くの生徒が来館した。
- ⑥ クリスマス企画として、自分が読んで面白かった本やマンガのお薦めメッセージを星型の紙に書いて夜空の背景に貼り付け、昇降口の掲示板に掲示したところ、好評であった。
- ⑦ 「渥美図書館ティーンズコーナー学生選書」の企画を行った。生徒がおすすめの本や読みたい本のPOPを書き、渥美図書館に提出した。渥美図書館にそれらの本を用意しても

らい、生徒が書いたPOPと共に学校図書室と渥美図書館で展示した。近隣の中学校も参加しており、それぞれの学校での交換展示も行った。中高生の目線で選ばれた本なので生徒の反応もよく、選書の参考になった。

ウ 問題点や課題点

- ① 幼・小学部は貸出回数も多く積極的に本に親しんでいるが、中・高等部になるにつれ、活字離れが見られる。本に接する機会を増やし、いかにして生徒たちに本に興味を持たせるかが課題である。
- ② 本に興味を持っている生徒が少ない現状で、本を薦めようにも困る側面もある。読書は趣味の1つであり手に取るのは好き好きだと思う。故にリクエストもマンガ等が多くなってくる。文学的作品をどうやって魅力的に伝えていくのかが課題になってくると考える。
- ③ 図書担当からでしか生徒へ本を薦めることができていない。より多くの教員と一緒に生徒への本を薦めることができるよう工夫する必要がある。
- ④ 卒論のために必要な本など専門的な内容になると、図書担当教員だけでは把握しきれないことがあった。生徒たちと一緒に探すことでその生徒たちにとっては「目当ての本を探す」という経験を積むことができた。司書が常駐していれば普段からこういったサポートができるので生徒のニーズに合った本を薦めるという観点においても、充実した学校図書館になると痛感した。
- ⑤ 司書教諭が、図書館業務にもっと専念できる環境が必要だと思う。
- ⑥ 教員や図書委員が図書館だよりで薦める本を、実際に図書館まで借りに来る生徒は少数である。生徒のニーズや関心がある本を、教員から生徒へ、または、生徒から生徒へ、フェイス・トゥ・フェイスで紹介できる環境を作っていくことが必要である。

(2) 福江高校における「公立図書館と連携して本を薦める図書館活動」

ア 福江高校の紹介

福江高校は、渥美半島の先端に位置し、敷地内には川が流れ、夏にはホテルも見られる豊かな自然に囲まれた学校である。1年生2クラス、2・3年生3クラスの合計8クラスに加え、同じ校舎内に併設されている豊橋特別支援学校の分校「しおかぜ教室」の生徒を合わせて242人の小規模校である。

イ 図書室の利用状況

図書室は校舎本館の4階に位置している。本を薦めるどころか、まず足を運んでくれる生徒が少なく、貸出冊数が0冊の日も少なくない。そのため、図書室を利用する生徒の希望をできる限り取り入れることを心掛けている。図書室を利用する生徒は本が好きな生徒ばかりではなく、勉強をしに来る生徒や授業で出された課題のための資料を探しに来る生徒、本には全く興味はないけれどただ時間をつぶしに来る生徒など様々である。

また、授業で生徒が図書室を利用することもある。福江高校は普通科に「福祉実践コース」「観光ビジネスコース」が設置されている。「福祉実践コース」では介護や福祉の図書資料や、保育園実習のための絵本、料理実習のためのレシピ本、「観光ビジネスコース」では地元の特産物や観光名所を紹介しているパンフレットなどが生徒の人数分必要になる。また、地元である田

原市に関する本や、2年生が修学旅行で行く沖縄に関する本は、毎年各学年の調べ学習で必要になる。進学や就職に関する本や、生徒それぞれの進路に関する本をリクエストされることも多い。生徒からの「〇〇な本ってないですか？」というリクエストや授業での利用は、図書室に関心をもってもらう絶好の機会である。しかし、学校図書館の限られた予算では、すべての生徒の希望に沿った本や魅力的な本、こちらが薦めたい本を用意することはとても難しい。そこで、数年前から田原市渥美図書館の団体貸出サービスを利用している。田原市渥美図書館までは、福江高校から徒歩5分ほどと距離が近く、生徒も授業後によく利用している。また、団体貸出サービスの利用をきっかけに交流が増え、展示企画やイベントなど連携して行いやすくなった。

ウ 田原市渥美図書館との連携

(ア) 団体貸出サービスの利用

団体貸出サービスとは、図書館が学校や児童館などの団体利用者に対して図書館資料を貸し出すことである。渥美図書館の場合、貸出期間は2か月で、一度に300冊までの図書館資料を借りることができる。福江高校は昨年度、団体貸出サービスを利用して1,000冊以上の本をお借りした。団体貸出を利用することで、調べ学習用や展示用の図書資料を十分に揃えられるようになり、授業で図書室を利用してもらえることが増えた。

そういった学習用の図書資料だけでなく、生徒や教員から「読みたい」とリクエストされた図書が渥美図書館の蔵書にあれば団体貸出サービスで借り、学校の図書室で貸出をしている。学校図書館で本を購入する場合、リクエストされてから貸出できるまで1か月以上はかかってしまうのだが、渥美図書館の蔵書をお借りすることで早ければその日のうちに提供できるようになった。特にリクエストの多いライトノベルをまとめてお借りすることが多い。また、「シリーズ物の小説の途中の巻から読みたい」「すでに絶版となった本が読みたい」といった購入することが難しいリクエストにも対応できるようになった。



【調べ学習用に団体貸出サービスでお借りした渥美図書館の資料の展示の様子】

(イ) ティーンズコーナー学生選書「渥美図書館の本棚をいっしょに作りませんか!？」

渥美図書館ティーンズコーナーには、福江高校の生徒や、近隣の中学校の生徒が選んだ本でできている「学生選書の本棚」がある。これは実際にティーンズコーナーを利用する中高生の希望を反映し、蔵書の充実を図るとともに、学校図書館だけでなく公立の図書館にもより多くの生徒に足を運んでもらうために企画されたものである。渥美図書館から各学校の図書室に選書用の応募用紙が配布され、福江高校では図書室に常置してあり、図書室を訪れた生徒に記入を薦めている。この応募用紙は図書名を記入するだけでなく、PRポイントを自由に書き込めるようになっており、そのままPOPとして展示することができる。生徒が選書した本の中から毎年10冊程度の本が渥美図書館の蔵書として購入されている。購入された図書は選書した

学校が優先的に借りることができ、「生徒のおすすめ本」として学校の図書室で展示することができる。同じ生徒目線で選ばれた本は、図書室を利用する生徒からの反応もよく、また、展示を見たことをきっかけに「自分も書こうかな」と選書する生徒もいる。実際に選書した生徒が自分の選んだ本が展示され、他の生徒が手に取り貸し出されていることを喜び、楽しんで次の応募用紙を書いている様子も見られた。

(ウ) 好きな一文ノート

POPをつけて本を展示することで、本に目をとめてもらうことができる。だが、POPを作るには、本のあらすじや感想を書いたり、絵や色をつけて目立つようにしたりする必要があり、ハードルが高いという生徒が少なくない。

POPよりも気軽にその本のよさを伝えることができないかと考え作り始めたのが「好きな一文ノート」である。「好きな一文記入用紙」は生徒が本を借りる際に本に挟んで渡し、本を読んでいる気になった一文や、好きなセリフやシーンを抜き出してもらおう。提出された用紙は、コピーしてPOPとして利用することができる。また、その用紙をノートに貼りまとめている。本に限らず、アニメやマンガのセリフや座右の銘など自由に書くことができるので、POPを作るよりも簡単で、生徒も気軽に書いて出してくれることが多い。ノートは誰でも読むことができるようになっている。先生が書くこともあり、生徒の関心は高い。

また、ノートを読むことや好きな一文を書くことを楽しんでいる生徒が多く、本ではなくノートを借りていく生徒や、自分の読書記録のように好きな一文を書く生徒もいる。ノートは少しずつ積み重なり、今年度で8冊目に突入した。

渥美図書館の方がこの取組に関心をもってくださり、渥美図書館で「好きな一文ノート」の展示を行うことになった。学校での取組を、渥美図書館を利用する地域の方に見てもらえるよい機会となっている。渥美図書館でもノートを作成し、年に一度、渥美図書館と福江高校の図書室で「好きな一文ノート」を交換し展示している。



【渥美図書館ティーンズコーナー
学生選書の本棚】



【生徒が記入した好きな一文】



【渥美図書館での展示の様子】



【福江高校での展示の様子】

(エ) 絵本の読み聞かせ練習

「福祉実践コース」では保育園実習を行っている。生徒は、保育園実習へ向かう前に絵本の読み聞かせ練習を行う。授業の一環として渥美図書館を訪問し、読み聞かせる絵本を選ぶ。絵本を選ぶだけでなく、渥美図書館の司書さんに絵本の読み聞かせ講習をお願いしている。学校の図書室とは比べ物にならない豊富な絵本の中から、それぞれ実習へ向かう園児の年齢に合った本を選ぶことができる。絵本を1冊に選びきれず、2～3冊借りていく生徒もいる。選んだ絵本は学校のカードでまとめてお借りして、各自保育園実習へ持参する。

実習への意欲を高めることが目的だが、実際に渥美図書館を訪れることで、それまで一度も渥美図書館を利用したことがなかった生徒がこの読み聞かせ練習をきっかけに学校帰りに寄るようになった。



【渥美図書館の児童書コーナーで本を選ぶ生徒】

(オ) 夏休み実験教室&冬休みスイーツ実験教室

渥美図書館と、福江高校の部活動であるみさきクラブと手芸食物部が連携して、夏休みと冬休みにイベントを行っている。夏休みは、みさきクラブの科学実験教室を行い、スライムを作ったり傘袋ロケットを作って飛ばしたり、身近にある材料を使った簡単な実験を通して楽しみながら科学を学んだ。渥美図書館で行うだけではなく、近隣の児童館へ訪問して実験教室を行った年もある。冬休みは、手芸食物部のスイーツ実験として、お菓子作りを通して食べ物に関する実験を行った。どちらも実験を行うだけでなく、渥美図書館の司書さんによる実験に関係する本の紹介もセットで行い、それぞれの部活動の特色を生かしてイベントを行っている。子どもたちに喜んで



【夏休み実験教室の様子】

らえたことだけでなく、図書館は本を読むための場所ではないと知る機会にもなった。

4 考察

(1) アンケート調査の結果について

ア 図書担当の先生による取組について

各校がその学校の特徴に合わせて、多様なテーマのコーナーの設置や、よく練られた企画を実施している。効果的な取組として、各教室においては、推薦図書をまとめて生徒に伝えたり、授業に関連した本を紹介したりしており、図書館においては、居心地のよい雰囲気を醸成し、季節や行事に合わせた本を表紙が見えるように配架を工夫することで、それらの本を来館者がよく手に取るようになっている。また、来館した生徒に教員が声かけし、一緒に本を探し、個々の生徒に合った本を薦めることが効果的である。

イ 図書委員など生徒による取組について

購入希望図書について、生徒から読みたい本を募ったり、図書委員が書店に足を運んで実際に手に取って選んだりするなど、“生徒ファースト”で選定することが大切である。

また、図書委員や来館者自らが作成するPOPや、読後の所感を記す伝言板など、生徒の手による本の紹介がとても有効である。さらには、地域の図書館や中学校と連携し、様々な生徒の目線で本を選ぶことが、よりよい生徒の反応を引き出している。

(2) 福江高校における「公立図書館と連携して本を薦める図書館活動」について

団体貸出サービスを利用するようになってから、用意できる図書の種類や量が増え、生徒への貸出の幅が広がった。生徒のリクエストにいち早く応えられるようになり、継続して利用することも増えた。福江高校の図書館にとって渥美図書館との連携は、生徒の読書環境を整える上で必要不可欠である。また、こちらが本を借りるだけでなく、企画展示やイベントを通して、学校図書館と公立図書館のどちらにも関心をもたせ足を運ばせることが、生徒の学習する機会や選択肢を増やし、学習支援につながると感じている。今後もお互い情報交換をし、できることを模索しながら、地域の図書館と連携し生徒に本を薦めていきたい。

5 今後の課題

生徒に対して、本に接する機会を増やし興味を持たせるためには、多くの教員が関わる必要があるであり、そのためには教員が日頃から本を読むことが必要であろう。各学校において、読んだ本の所感を話し合う機会を増やしたり、各分野における良書の情報を伝え合ったりして、まず教員が本についての知識を蓄えることが重要である。特に、多様な生徒へ多彩な本を薦める上で、司書や司書教諭など、図書担当教員が図書館に常駐し、開館時間を長くして、本に関する情報発信をしていきたい。

また、生徒と教員は互いに違う人間であるが、同様の心境に至ったり、悩みを抱えたりするなど、それぞれの体験が重なり合う場面があると思われ、本を薦めることは、教員の読書体験を含めた人生経験を生徒に伝えることであると考えられる。生徒に本を薦める際は、生徒の立場に立ち、その声に耳を傾けながら、生徒が求めるものや生徒に必要なものを感じ取り、一人ひとりに合った本を紹介することを心がけたい。そして、本を通して、教員と生徒及び生徒同士の間にも生まれる交流を大切にしていって、その継続や拡張を図っていきたい。